

大島干潟や藻場で出会う生き物たち

魚の育成場でもある大島干潟

これまで造成後の大島干潟では、多くの生物の干潟やアマモ場での定着が、報告されています。多くの生物は、干潟やアマモ場を、生息場や産卵場、幼稚仔魚の成育場・隠れ家として利用しています。

現地漁業者の方のお話だと、「大島干潟は、アマモが増えたことで、魚が増え、特に春季には、メバル、タケノコメバル、ナマコ、カレイ等が獲れる」そうです。

生物多様性の調査

令和5年度8月の夏季の調査では、多くの魚を確認し、特に、「アカエイ、コノシロ、マゴチ、ワニゴチ」については、大島干潟で初めて見る生体でした。また、近年、クルマエビの幼体が、確認されたことから、同じ時期に、大島干潟においてクルマエビの放流を行いました。

令和6年2月の冬季にも調査を行いました。今後も里海として積極的に干潟を利活用することで、干潟環境及び生物多様性の向上を目指します。

<夏季調査結果> 調査日：令和5年8月31日、9月1日

調査方法	発見された生体	
刺網調査	魚類	アカエイ、コノシロ、ウミタナゴ、マゴチ、ワニゴチ、ハモ、タケノコメバル、ヒガンフグ、オニオコゼ、カワハギ科
	甲殻類	タイワンガザミ、イシガニ
環境DNA調査	魚類	クロダイ、クサフグ、サヨリ、ボラ、クロメバル、ムラソイ、マハゼ、ゴンズイ、アイゴ
	甲殻類	クルマエビ、アカホシマメガニ、クマエビ

<冬季調査結果> 調査日：令和6年2月22～23日

調査方法	発見された生体	
刺網調査	魚類	カサゴ、ウミタナゴ、タケノコメバル、ヒガンフグ、メバル属、ボラ、クロダイ、オニオコゼ、コノシロ、アカエイ
	その他	アカニシ、イトマキヒトデ

刺網とは

漁獲しようとする魚類が、通過する場所を遮断するように張り、網目に刺させたり、絡ませたりして漁獲する漁具のこと。

環境DNA調査とは

個々の生物個体からではなく、海・川・湖沼等の水、土壌、大気といった環境の中に存在する生物由来のDNAの総称のこと。この環境DNAを採取・分析することで、その環境に存在する生物の種類、特定種の存在の把握、生物の量や個体数の推定が可能となる。

里海とは

人手を加えることにより生産性が高く、生物多様性が高くなった沿岸海域のこと。